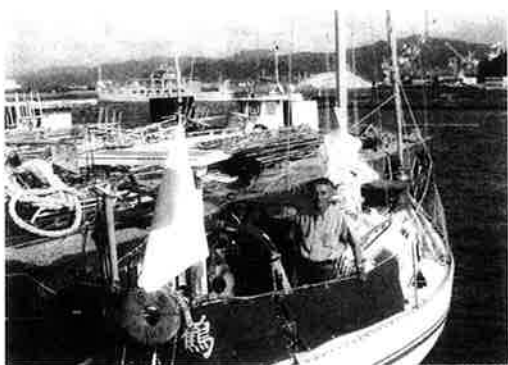


# ふるさと 歳時記

舞鶴からヨットで佐伯へ

五月二十八日、京都府舞鶴市在住の佐伯叔久さん（六一才）がヨットで佐伯港に來航された。



愛艇「翔鶴」と佐伯叔久さん（佐伯港）

佐伯さんは元海上自衛隊員で輸送艦の機関長を退職後、舞鶴汽船「ゆうなぎ」の船長を勤め昨年退職している。

今回、セーリングヨットで約二カ月の航海計画を立て、五月一日に舞鶴港を出航、日本海を南下して鹿児島島の親戚に立ち寄り、大隈半島を廻って日向灘を北上して佐伯湾に入った。

佐伯さんの亡父は愛媛県丹原町出身で、当家系図には、

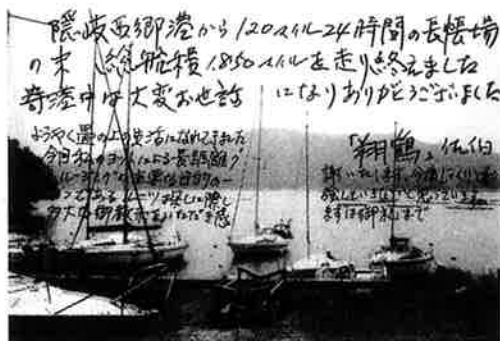
「初代 佐伯藤左衛門義里

天正十六年八月廿四日に九州より伊予国に渡り桑村郡田滝村中ノ谷に六町十五分の屋敷を取り定め居住す。」と書いてあり、豊後佐伯に手がかりを求めて寄港されたのだ。

愛媛県東予地方の佐伯氏は戦国時代、河野氏や黒川氏の旗下として活躍している。四国勢は秀吉の四国征伐に降り、九州征伐に動員された。九州平定後、

仕官のかなわなかった人々は旧地にもどり帰農したのである。

佐伯を出航したあとは、伊予八幡浜から南下して足摺岬を廻り、四国を一周して愛媛県東予港に入って、亡父の墓参をするという。瀬戸内海から関門海峡を抜けて日本海に出る。舞鶴港に帰着するのは七月二日の予定だという。



無事帰港のはがき

## 独歩碑除幕式

六月十三日（日）初代独歩碑移設除幕式が独歩館裏庭で催された。移築された古い独歩碑の背後に設置された解説文に、その経緯と碑文が刻まれているので紹介しよう。

初代独歩碑について

明治の文豪・国木田独歩を称えるこ



除幕式神事

の「独歩碑」は、昭和十一年六月に、佐伯独歩会によって城山西の丸の一角に建立されました。

その後、碑は壊れて碑文も読めなくなっていました。このたび、碑創建当時の「豊州新報」によって全文が判明し、さらに独歩ゆかりの旧坂本家邸内に、この碑を移設できたことは大変な喜びです。

独歩がこよなく愛した城山を背景にたたくむこの碑を象徴として、今後とも独歩文学を愛する心を佐伯の地に培い育ててゆきたいものです。

平成十六年六月吉日

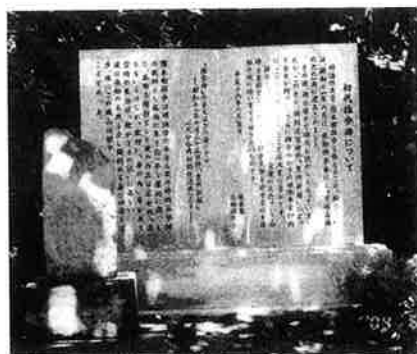
坂本家

佐伯独歩会

「独歩碑」の全文は次の通りです。

昭和十一年六月二十五日付「豊州新報」（大分合同新聞社提供）より――

国木田独歩は明治廿六年廿三歳の時



独歩碑と解説文

鶴谷學館／の教師として佐伯に来たり約一年を當地に過ごし／た、佐伯を題材とした彼の作品は處女作「源をぢ」をはじめ「鹿狩」「春の鳥」等があり／當時の生活は「欺かざるの記」に委しい／彼は佐伯の自然を愛し閑暇ある毎に四邊を跋／渉、殊にこの城山は朝夕逍遙して冥想するところであった。

昭和十一年六月二十三日

## 佐伯の先哲・矢野龍溪

八月二〇日、第五回四教堂塾の講座で、先哲史料館主任研究員の安田晃子さんが「矢野龍溪の魅力」と題して講演された。

またOAB『なんでも大分見聞録』で「佐伯毛利藩と矢野龍溪」が企画され、九月四日の放送に向けて、この日、大分県広報課および佐伯市教育委員会と打ち合わせがあった。

龍溪のことは大分県先哲叢書「矢野龍溪」の資料集全八巻・評伝・普及版が大分県教育委員会から出版されているが、初心者には普及版をおすすめし



矢野龍溪

たい。子供でも読めるように易しく書かれている。

### 徳富蘇峰の書か？

前号に紹介した上野村原田家に、表装もされず折りたたんだ一枚の書幅が見つかった。蘇峰とあり落款も押している。蘇峰は肥後出身のジャーナリストで矢野龍溪に国木田独歩を紹介した人物である。

この漢詩について龍溪は『西遊漫記』に「早春の句」と題して随想している。

龍溪が十九歳のころ、新しく塾に入ってきた少年の扇に「野火烧不盡



蘇峰書・白樂天の詩

春風吹復生」と書いてあった。早春を詠んだ句に感心して聞くと、大坂にいたとき師とせし儒生が戯れに記したという。

龍溪は深くこの句を感じて忘れなかつた。その後十八、九年たつてある本を読んでいたら、この句が大坂の儒生の作ではなく白樂天の句であることを知って、自分に詩味詩境を解する力があつたのだと喜んだという。

徳富蘇峰の生家は熊本県水俣市にある。問い合せたところ、蘇峰の書は比較的多く残っていて、余り高値はついていないという。

〔新刊紹介〕

◆船頭町消防百年史

記録資料編 汐月三代吉編集

船頭町に残存していた消防団の記録帳は明治二五年から三九年、大正四年から昭和一〇年までのもので、その中間を欠いているが、自治消防団の記録として貴重な資料である。

当時史談会長だった汐月三代吉氏は、平成七年に「まえがき」を書いて編集に取り掛かり、平成十一年に編集を終えて「あとがき」を書いた。しかし、奥さんの看護に自らも倒れ、そのまま



になっていたが、リハビリに通いながらパソコンに向かった。苦節八年の歳月を経て、今年四月に刊行された。

B5版 三一〇ページ 非売品

◆佐伯四国札所めぐり(その四)

今年度の現地研修で十五番から一番までを巡り、収録された。四年間十四回に及ぶ現地研修が終わり、年度ごとにとまとめられた冊子も四巻で完結した。

B5版 写真カラー刷り二二二ページ  
編集 林寅喜(会員)

◆愛媛の歴史地理研究

愛媛史談会長 武智利博編

○明治時代前期の愛媛県(伊予国)における村の合併 柚山俊夫

○近代城下町松山の形勢とその変容 窪田重治

○伊予における水論について 門田恭一郎

○愛媛近代漁業のあゆみ 熊谷正文

○瀬戸内海・宇和海地域の養殖業の展開

武智利博  
○今治地方の綿工業の盛衰 越智 齊

(伊予史談会謹呈図書・佐伯史談会蔵)

◆土佐の堅田氏

先祖と子孫 堅田貞志編

さて私事、堅田氏の先祖に関心をもち、十数年にわたり諸先輩の指導を受けながら、先祖の活躍せられました土地を尋ね、各種の資料の提供を頂き、また各種の図書を読むにつれ、先祖の偉大さと活躍に感動を受けました。

こうした先祖の歴史に残る活躍が、現在の私達の平和な生活の礎を築いて下さったものと感謝すると共に、子孫の方々に此の先祖の偉業を知って頂きたく、此処に一冊の本にまとめてみました。

A5版 一四八ページ  
高知県須崎市吾井郷乙四八三  
番〇八八九一四五―〇三〇二  
(佐伯史談会員) 堅田貞志